

はじめに

座長 田端氏

本日の主な内容は、防災減災というよりむしろ、コミュニティづくり、コミュニティとの関わり方といったご発表が多いのかな、と思います。これは元気な地域づくりということで、まさにコミュニティから元気になると。そのためには、お一人お一人が力づけられること、それが多分大事だと。おそらくこの分科会は、他の分科会と少し違うのは、そうしたお一人お一人を力づけるというところに焦点をあてた発表が多くなるのかな、というように思います。ですから、どうコミュニティを拡大していくのか、コミュニティをどう巻き込んでいくのか、そんなところのお話が聞ければ、他の分科会とのお話の違いを明確にし、なおかつお話が連続していくのではないかと思います。発表会は、だいたい教室型の会場で行われますが、この会はラウンドテーブル型ということで、ある種、意見を皆さん出しやすいという感じを主にしてあります。ですから、皆さん方には、今日は発表をしていただきますが、ある種、話題提供ということで、この後の議論が活発化するような、そのような話題を提供いただければと思います。

子どもが主人公になる居場所づくりを通じての人と人がつながる町づくり

NPO 法人 ハートフレンド 徳谷氏

参加者：すばらしい形で連携をとっていかれて、最初は1つの場所を拠点にして、子どもたちのために、それこそお年寄りのために、活動され、いいところを出し合う、というところに感動させていただきました。質問というか感動して、すごくありがたい発表を聞かせて頂けたなと思っています。ありがとうございます。

参加者：私は留学生なので、日本に来て学んでいます。地域の子どものためのこんな発表は初めてなので、すごく貴重な話でした。ありがとうございます。

田端氏：中国からですか？

参加者：はい。内モンゴルからです。

田端氏：ご家族を大切にされる場所ですね。日本との違いを感じたことはありますか？

参加者：私は、内モンゴル民族なので、家族を大切にするというのは、日本人の方々の思いと似ています。家族を大事にする、子どもたちの将来について、何かをやるっていうのが、すごく似てるなと思います。すごくいい勉強になりました。ありがとうございました。

田端氏：文化的基盤を作っていくところが、似ているのではないかとことですね。ありがとうございます。

Q：城東区からきました。徳谷さんの活動をよく存じております。徳谷さんの活動は地域振興会をベースにされているのですよね。

A：ベースではないですが、寄り添って頂いているというか。

Q：今は変革期になっているので、その影響とかもあるのでしょうか。ただ地域振興会そのものの変革を上手に先取りされているっていう点があって、ものすごくうらやましく思っているのですが、影響等はあるのでしょうか？

A：地域活動協議会の件ですか？そうですね、今は区の方でもハートフレンドも入ってほしいと言われ入らせて頂いて、地域には今までもしてもらってばかりなので、お役に立てたらな、と思っています。

Q：極端な事を言ったらNPOと言っても、グリーンピースとかと同じような感覚を持たれるような連合町会長が多いので、どうされているのでしょうか？

A：おっしゃる通りです。最初は、「徳谷さんNPOになって国からいっぱいお金もらえるねんな」と言われました。いやいやもらっていません。でも今は、この9年、やって5年くらいたちますので、少しずつ地域も頑張っていて、学校長が言うには、地域の子どもに成果が出てると。見ていたらわかると。ご講演で口コミとか、やっぱり成長とか喜んでくださる方が増えると、そういう偏見も少しずつなくなったらいいなと。

田端氏：周りからもご支援いただけるということ、そういう応援だと思えます。先ほどもありました、コミュニティという部分と、NPOという組織の部分と、ある種今まで、合わなかったところもあるんですけども、コミュニティをベースとしたNPOというのが、ひと

つのこれからの解決策ではないかと。このよう
なご提案ができるのかな。と思いながら聞
かせて頂きました。

Q：貝塚から来ました。子ども活動を20年来や
っています。今、特に減退期ですよ。行政
側の方が。一番いいなと思ったのは年齢幅が
かなり広いというところ。私は子ども語録と
いうのを非常に大事にしています。子どもの
一声、一声っていうのを記録して、今1000
以上あるのですが、我々からしたらものすご
い数になりました。子どもの会話とか、子ど
も同士の会話とか、あるいは大人に対するメ
ッセージとかはどうされているのでしょうか。

A：特に記録には残していないですが、これから
そういうのも心がけてみます。いいですね。

Q：そしたらやっぱり、小さなワークショップみ
たいにとかされてね。例えば、今日の夜やっ
たら、今日の反省会しようかっていう程度で
いいんと思うんです。そこを大学生が高校生
をサポートする、高校生がサポートする、で
小学生が。と、いろんな形態がほっといても
出てくると思うので。

A：ありがとうございます。すごいヒントを頂き
ました。

田端氏：子どもたち同士で、たぶんやられている
と思うんですけども、先輩たちが後輩の子ど
もたちを教えていくと、そういう循環をつく
っていったらどうかと。これは確かに面白い
アイデアですし、この辺でまた力ができるん
じゃないかな、と思います。

重度のアレルギーっこの子育ての不安が減少し、 保育園・幼稚園・学校生活が安全で安心して過 ごせる地域連携協働のコミュニティ

大阪狭山食物アレルギーアトピーサークル

Smile・Smile 田野氏

Q：うちの子も小さい頃からアトピーで、食物ア
レルギーもあるんですが、こういったサークル
っていうのは参加したことがありません。
なかった、っていうのもあるんですけども。
そのサークルの中で、きっと当事者の方が大
半だとは思うんですよ。話すことってやっぱ
りちょっと暗いことになったりね、「こんな
事がある」とか。そういう悩みだけじゃな
くて、「楽しく」というお話があったじゃな
いですか。その「楽しい」というのは、ど
ういう感じなのでしょう。雰囲気づくりな
のか、それとも楽しい講座なのか、どうい
うことをされているのか、お伺いしたいです。

A：まず、悩みには必ず先があると思うんです。
すごく不安なことも、次のステップのまず前
触れだという風に話をしています。やっぱり、
食べる治療になってきたら、失敗しましたっ
ていう表現なんですけど「ダメ」だ、病院に
行って食べて「ダメ」なお子さんもいるん
ですね。でもそれが次のステップで、これがな
いと次には進めない。子育ては子どもさんの
病気って親がすごく心配すると思いますが、
私たち保護者が、アレルギーばっかりに関与
するわけではなく、私生活でも、特にアレル
ギーがないお母さんが、違うお話しをしたり
することで、楽しさを共有できたり。あと、
コンサートを開いて、大人と子どもがおもい
っきり遊べる機会を作ったりとかをしています。

田端氏：ありがとうございました。先ほども少し
触れて頂きましたが、アレルギーを持っている
お子さんのお母さんだけではなく、全市民
的に考えてみると、障害者の問題も、もとも
とは当事者がずっと頑張ってきて、今はバリ
アフリーなり、ユニバーサルデザインだ、と
いう形で、全市をあげてそういったものがや
さしいまちづくりだっていう認識がされて
きています。アレルギーもそうした形で、皆
さんと共有されることが、こうしたまちづく
りと反映されていくんですね。

地域に根ざしたさまざまなコミュニティ作り

K-style 春田氏

Q: 私は、一つの講座を主催するのにも、広報から準備から、他の講師との調整から、すごく大変だなという思いをしました。そういった中、えむすまいるさんの多様な講座であるとか、色んな種類のことをやってこられていて、そういったバイタリティ、パワーがすごいなと思いました。

A: 気持ちです。気持ちで動きます。とりあえず、子どもたちの笑顔が見たいというのがあるので、何をしてくれたら喜んでくれるんだろうか、っていうところから企画を立てて、イベントをしったりするようにしているので。とにかく動きます。

Q: 子どもを遊ばせる事業を、いろいろしたいなと思っています。すごく楽しそうだなと、聞いていました。安全面、例えば体育館ではある程度の遊びのしびりがあったりとかがすると思いますが、公園とか外でけがした時はどうする等、その辺は重要視されているのですか？

A: 基本は、危険だと思う場所では、まずイベントはしないようにしています。リスクマネジメントを考えるので。あとはやっぱり看護師を帯同させるとか、緊急の手当てができる、救急講習会を受けている人を必ず置くとか、そういったこと。あとは事前に、必ず、体操というか、準備運動を怠らないっていう、あらゆることはやります。

A: 私は、えむすまいるで、元保育士という事もあって、子育て支援の大切さっていうのを、痛感しているので、説明させてもらっています。今のお母さんたちが、どんな事を求めているのか、今日ハートフレンドさんのお話を聞かせて頂いて、そういう事もあるのかな、と感じたりもしました。もうちょっとお母さんたちに話を聞いたりとか、そういうところからしていきたいなと思っています。

田端氏: 小学校以上になると、自分の意思を持ってきますが、その前のお子さんたちは、どうしてもお母さん方の、保護者の方の事を把握していけばいいのかなと思います。

男性が子育てに積極的に参加する地域コミュニティづくり～父親の育児参加で家族の絆を強くする～

パパの育児休業支援センター 古山氏

田端氏: 子育ての問題として、先ほど最近の男性の育児休暇の取得率ですが、比較的取りやすいと言われている、地方公務員でも大体 2%程度ということでした。男性の育児休暇取得率は、比較的取りやすいといわれているところでもそうですが、先ほど古山さんがおっしゃっていただいたように、実際には、もっと低いということです。そういう意味では、これから大きな期待を寄せられるわけです。つまり、制度をどうやってきちっと活かしていくのか。制度を作るのは国ですが、住民側が実のあるものにしていく、そのための活動である。それも非常にユニークで、これからのおもしろい活動になっていく風に思いながら聞かせて頂きました。子どもを持ったお父さんに対する相談だけではなくて、例えば企業の相談とか。企業としてもやはり、雇用に係る問題だったりするわけですね。育児休業中の方々が抜けている間、雇用したとしても、今度はその雇用した人をどうするのかといったことが出てくると、企業側もさまざまな問題を抱えているわけですから、そういう事にのってくれる企業っていうのが出てくるのかなと思います。

Q: 平日、パパたちは来れないので土曜日に特別に月 2 回、パパの広場をやっていました。パパと赤ちゃんしかだめという、一組か二組で、理由を聞くと、そんなん恥ずかしくて、行きたいけど行けないっていうのが理由でした。じゃあ、ママもいよいよ途中からでした。パパの料理教室とか、パパと赤ちゃんのおもちゃづくり教室とか、講師の男の方をお呼びしました。参加率は 5 組もいかないんですが、その秘訣など、パパたちに来て頂ける秘訣なんかをお伺いしたい。

A: こちらのペーパーの中で、イベント開催の欄に、地域、行政、企業が協働という事をお伝えさせて頂いています。今、おっしゃるとおり、男性の方でも興味を持ってらっしゃって、取りたいって思っている方はたくさんいるんですが、その方にどうやってこちらの情報を届けるかが、大きな課題になっているかと思っています。どうアプローチしていくかというところで、いろんなところと協働していく必要があると思っています。特に今回、実際

参加率が多かった理由としては、まずは、行政とっていうところになります。乳幼児健診に、私自身も子どもを1ヶ月検診、3ヶ月検診と合わせて、行ったばかりですが、ほとんどお母さんが連れて来られています。中には、私みたいに夫婦で来られている方もいらっしゃいました。そういったお父さんは、育児に興味のあるお父さんですね。そういったお父さんに届けることができれば、参加して頂けるんじゃないかな、と考えまして、地域の区役所の福祉課の方をお願いして、乳幼児健診の方でそういった方がいらっしゃったら、情報提供をお願いしたいということで、ご協力を頂きました。ソーシャルネットワークを使うと、例えば、大阪市の男性の育児参加コミュニティとかがあったりします。そこに対してイベント告知を行う等、いかに届けたい人に届けるのかということを強化しました。

田端氏：育休をとれるような社会をつくること。これが究極の目標なのかな、と思いながら聞いていました。それについても古山さん自身が、何か良くなったらいいなと思うことがあれば教えてください。

A：よく、一般にマスコミの報道等では、法の制度が不十分だと、それゆえ取得率が上がらない、ってというような現状があるのですが、私はそれは間違っていると思います。もちろん、スウェーデンとか世界で有数の制度が整っているところから比べれば、確かに劣るかもしれませんが、世界全体でいうと、十分、この育児休業制度ってというのは、素晴らしいです。それは、私自信が実際に取得したから思うことなんです。具体的な話になりますが、私は33歳で、初めて子どもが生まれました。今、男性の初婚年齢が、だいたい30代なんです。それから子どもが生まれますので、だいたい私と同じような感じの者が、子どもを産んでいる。授かっているっていうので、私がかくかく平均的な層になると思います。30代の男性の年収っていう事も考えると、だいたい400万円から多い人で600万円くらい。その男性が育児休業を1ヶ月とったら、いくら支給されるかっていうと、手取りで17万8千円。それぐらいの支給手当があります。さらに、今はひと月、1万5千円の子ども手当をもらえますので、手取りで20万弱の収入があります。これは、額面で換算するとしたら25万とか26、7万ぐらいの額に相当すると思います。それぐらいの月収

で生活している夫婦は、日本の社会では珍しくないだろうと思っています。そういう意味で、手当に関しては十分にあると思います。今は夫婦共働きの世帯が多いですね。夫婦ともに仮に育休を取ったとしたら、女性の場合は多少年収が下がるので、手当の方も下がっていきますが、それでもおそらく、合計すると40万弱ぐらいの収入になるんじゃないでしょうか。もう、それだけあれば十分、生活の方は問題ないですね。それなのになぜ、支給されてないのか、何が問題かという、二つの側面があります。一つは、男性、一般の男性といいますか、我々市民のことなんですけども。そういう風に誤解があるってことです。実際は、充実した制度であるにも関わらず、なんとなくイメージで給料が半減するとか、これじゃあ生活ができないとか、そういうようなイメージで取れてないんじゃないかということが一点。もう一つは、先生がおっしゃったとおり、企業側にちょっと原因があると思います。私自信も、育児休業を申し出た時、上司は男性が育児休業を取得できるとは思ってなかったようなんです。知らないことほど強いものはありません。この法律は、仮に拒んだりとか、あるいは制限したりするっていうことは、企業名を公表されるっていったような、罰則があります。しかし、知らないものですから、怖くないんです。だめって言ってしまえるんです。知っていたら慎重になりますよね、大企業とか、公表されたら困る企業など。そこが問題で、今回読売新聞さんの暮らし面や、日経新聞の社会面に報道して頂きました。日経新聞ってというのは企業の管理職の方だとか、ビジネスマンの方が読まれている新聞ですので、そういうところに投稿されることによって、こういった罰則があるとかが知ってもらうことによって、取得率が増えていく。要は、我々は何が言いたいかということ、こういった講座を通して、報道されることによって、一人でも知ってもらうことによって広がっていくんじゃないかな、と思っています。

田端氏：ありがとうございます。知ってもらうことが大事ということ。それは、本来、行政がむしろ積極的に奨励してるってことがあり、それは日本のある意味特徴かもしれませんが、まずは行政から。それからはっきりしていくということを期待しています。なかなかその部分が伝わらないという風には聞いております。いずれにしましても、この辺を

どう解決するのが、課題だということで終わりたいと思います。

西本願寺門前町に「にぎわい」を取り戻す まちづくりプロジェクト

龍谷大学門前町サークル

田端氏：龍谷大学さんは西本願寺の系統の大学なので、ある意味、宗教の中の一つの、学校の中の一つの方向性もあるのかなと思いつつ聞かせて頂きました。ただ非常に興味深いところは、門前町とお寺との関係が、分断されているんじゃないかということに気付かれたということ。まちそのものが、まちづくり活動としては比較的オーソドックスと言いますか、マップを作られたりとか、まち歩きをしたりとか、グッズを作ったりというのはオーソドックスですが、そこでどうやってお寺をからませていくのかっていうところに、「りん」を作るとか、いろいろ工夫されているなと感じながら聞かせて頂きました。

Q：活動されていて、一番自慢したいことはありますか？

A：毎月16日に「いちろく市」というのをやっていて、おりんちゃんのマスコットができたことです。その日の朝早くからやっているのですが、西本願寺にもアピールみたいなことをやっていて、利用者の人達もより集めて、掃除などに参加してもらうようにやっていることです。

田端氏：門前町の活用とみなさんの活動がコラボして、その中で、おりんちゃんというキャラクターを使っている。他には地域とどういう風に係わっていくのか。先ほどおっしゃって頂いたように、「朝の清掃活動とコラボしている」という部分ですね。他にもこういう形で地域の活動を大学生らしい感性で発信していくのかなと思います。先ほどのお話では、発掘して発信していくということでした。発信するツールを並べて頂きましたが、どうやって発信していくのでしょうか。地域の住民の方たちと、例えば一緒に話を聞きに行くとかされているんですか？

A：私は、昔、龍谷ミュージアムで門前町がどんな風になってたかっていう話を地域の方に聞きに行ったことがあります。

田端氏：地域の人に聞きに行ったってことはありませんか？サークルとしては、それはあんまりないですか？

A：朝とかの清掃時間に少しあります。

田端氏：今後、もう少し地域の方にもお話を聞く機会をもっていくと良いと思います。地域の資源が、先ほどのモノづくりとか、お話とかにも共通するように、そういうものが発掘できると思います。それを今度はうまく発信していくと。皆さんには力があると期待を込めています。

自由討議・意見交換

Q：色んなお話をありがとうございました。私は子育てとの関係といえば、子どもはおりません。今日、何故ここに参加させて頂いたかという、子どもがいないので、地域とのコミュニティをとっていかないと、これから自分が生きていけないのではないかと、ということを非常に危惧して参加させて頂きました。特にハートフレンドさんと SmileSmile さんにお聞きしたいのですが、防災という意識を私は持っていて、防災とは生き抜くことだと思っております。その中でハートフレンドさんの方からは、子どもさんの防災体験というものをされているということをお聞きしました。本来的に言えば、地域での自主防災組織というものに努めていて、それとの連携というものを当然、考えてられるとは思いますが、どのように、されているのか、もしくは、今後どうされるかということをお伺いします。もう一点 SmileSmile さんにお聞きしたいのは、同じ災害の事に関しまして、東日本大震災でも食物アレルギーで配布されるっていうか、そういう物資について非常に、困難という話も聞いたことがあります。その中で、安心、安全ということを先ほどもおっしゃっておられたので、その時について、何らかの取り組みを考えておられるのであれば、今後のことでも構いませんので、お聞きしたいです。

A：防災探険クラブは、大震災があったあと結成されました。地域の防災リーダーの方々、講師になっていただき、まずはご講演をしていただきました。地域の防災についてどのように取り組んでいるのかを子どもたちにお話して頂きました。地域では何回か、公園で防災訓練をしていましたが、今まで子どもたちは参加してなかったようなんです。町会から、大人たち、班長さんとか、偉い方々が多いんですけども、そこに子どもたちもぜひ、という事で呼んでいただいて、喜んでもらいました。そういう地域の方々と一緒に、リーダー

の方たちや、となり近所のおじいちゃんやおばあちゃんたちと一緒に参加を、その年からさせて頂いてます。また、区の消防署長さんをお願いして、この区からも講師に来て頂いて、公園の緊急の時の配水や倉庫を開けて頂き、こんな風にするんだよ、ということも、行政の方からもご指導して頂きました。区役所に防災の担当課長がいらっしやいまして、そこからも、一緒に防災探険クラブを区役所の事業として、学校の事業として取組をできるようにして頂き、昨年、一昨年から、各小学校、14 小学校の中で授業として、各小学校で子どもたちを集めて、同じような防災リーダーを作っていくといった取組を、区役所が始めてくださり、ちょっと広がったかなと思います。まだまだですが、今年も25年度もさらにいろんな方々と一緒に参加させて頂きながら、子ども独自の感性で考えた、緊急マップのカードを作りましたので、その普及にも努めていきたいと思っています。

田端氏：ありがとうございます。SmileSmileさんにもご質問がありましたので、どうぞ。

A：災害時、これは省エネルギー学会でなんですけど、このパンフレットを大阪狭山市と堺市、富田林市の近隣の幼稚園、保育園、小学校、消防署で、行政機関にすべてお配りさせて頂きました。あと、食物アレルギーのお子さんに関してなんですけども、アルファ米の白米には、アレルギーはございませんので、それが大阪狭山市で備蓄されているかの確認。アレルギー用ミルクの備蓄の確認をさせて頂きました。今、アレルギーの方で内閣府の方でも、検討委員会があるというお話があります。あと、私たちサークルと連携をとって頂いています、アレルギーを考える母の会が、災害当時より、今の方が月に2回、3回。災害地に協力をし、その地域のアレルギーのお子さん、アトピーのお子さん、喘息のお子さんの情報提供だったり、エピペン講習会だったり、緊急対応の講習会をしています。地域で、病院でも、なかなか緊急の対応ができない病院もありますが、そういう先生方にも情報を、アレルギー学会の専門医をその被災地にお呼びして、今もまだ研修会をされています。大阪狭山市に関しては、情報誌を常にどこにでもおいて、誰でも見て、災害が来た時にでも、誰でも協力頂ける体制っていうのを、今、少しずつ話し合っ、今年に、災害についての講習会なんかもまたしていこうと考えております。

田端氏：最初に申したとおり、皆様方、ある種、当事者という形でそれぞれ事業にかかわってこれ、それをコミュニティに広げていく。あるいは、コミュニティを動かしていく、巻き込んでいくということに、成功されてきた事例、または成功しつつある事例かなっていうように思います。もちろんそれぞれにおいて、ぶつかっている課題っていうのはありますが、その課題をどう超えてくのか。例えば、行政とより密接に関連を持つことで、超えていくということもできるでしょうし、そうではなくて、もっと参加者を増やしていくという形で、超えていくこともできるでしょう。それから、龍谷大学さんは課題が出てきているわけですが、もっと当事者であるお寺とか、門前町の人ともっとかかわっていく、係わりを深めていく。広げていくのではなくて、深めていくことで課題が解決できるかなと思われるところもございます。そういう形でいくつか課題解決の方法の道筋というところも、みなさんの中の議論に少し出てきたかなあ、と感じているところでございます。